遠州

天竜川・名小尾沢～竜頭山

三井（単独）
11年10月31日

天竜川を北上し、南ア深南部と呼ばれる山域に至る前衛部に「竜頭山」がある。
静岡県内の岳人には知られた身近な山だが、二昔も前に発行された静岡県の山のルートガイド集にこの辺りの沢が数本掲載されている。
沢シーズンの終盤の今ごろは落穂拾いのように、県内の殆ど記録の無い日帰りの沢に入り込んでいるのだが今回、そのガイド集にあった「名小尾沢」に入ってみる事にした。
そのガイド集の遡行図をみると小さい沢ながら結構滝があるようで、この辺りの代表的な沢、という事らしい。もしかしたら「拾い物の沢かも…。」

順調に車を走らせ、「名小尾沢橋」に車を止める。沢名と一致しているので出合いは分かり易い。
沢支度を済ませ、橋の脇から沢に降りる。水量は少な目で、大岩がゴロゴロしている。
歩き始めると期待が失望に変わるのに時間はかからなかった。
いくら遡っていっても遡行図に記された滝がない。確かにゴロゴロした大岩の間から水流が落ちている箇所はある。件のガイドブックの遡行図の記録者はそれを滝として表記しているのだが僕の感覚ではそれは滝とは言い難い。
「ハズレかなぁ…。」の思いがじわじわと広がっていく。
1時間ばかり沢を遡って行くとコンクリートの橋がありしっかりした道が通っていた。（道の先には小さな集落がある。）
地図に見入っていると車が通過していったが運転している人は僕を胡散臭そうに見ながら通り過ぎて行った。
無理もない、この辺りでガチャをぶら下げた登山者を見ることはないだろう。
橋から上も相変わらず大岩のゴロゴロした沢が続いているが暫く遡って行くと滝らしいものも現れ、ゴルジュっぽい所もありで、漸く沢登りをしている気分になる。と、言って困難な箇所がある訳でなし、淡々と進んでいく。
それも束の間、小ゴルジュを越えると堰堤があり、ガードレールのついた林道が沢の脇を通っていた。気持ちが更に萎えるが先に進む。
平瀬の小沢となり少し進むと沢の脇に小屋が建っていて浜松の山岳会名の看板がある。その会が保有しているものだろうか。小屋の横には露天風呂も作られている。
荒れた沢に沿って崩れかけの踏跡があり、辿っていくと沢の脇に小さな小屋があり、覗いてみると何故か写真や俳句を展示していたような跡のある小屋だった。「こんなところに何故…。」「一体、誰が見るというのだろう。」なんとも不思議な光景で狐に摘ままれたような感じ。
更に進んでいくとまた建物があり、

近づいてみるとそれは荒廃した神社だった。
集落の神社にしては大きなものだが、先の台風で破損したものか屋根はシートで覆われている。他にまるで飯場のような宿泊施設らしきものや、積み上げた石垣だけが残っているものがあった。
肝心の沢だが神社の先に大きな滝が落ちている。2 段 15mと称される滝だがガしっぽい斜面からチョロチョロと水流が落ちていてしょぼい滝だ。
件の遡行図ではこの先にさらに同じような滝があるがそのあとは稜線まで一本の線で簡単に記されていて、要はもうこの先は何もない、という事のようだ。
本来、沢登りは稜線まで達して完遂なのだが上がらないままのテンションはここへきて更に下がり、先に進む気持ちはすっかり無くなってしまった。「さて、どうするか…。」
見ると左岸の斜面に細々と踏み跡が付いている。地形図に破線はないが確か昔はルートがあったハズだ。
折角なので何十年振りかで「竜頭山」までP.Hしてみるか。
つづらの急登になっていて、一汗かかされ尾根にでる。薄い踏み跡を辿って行くも小さな登り下りがあって意外に手間取って「竜頭山」の頂上にでた。
頂上には通信関連の大きな施設があって、苦労して登っても気分を削がれるし、それに稜線の直ぐ下を「スーパー林道」という訳の分からない林道が通っていてこれも気分を害される。いつからこんな山になっていたんだろう。
頂上には数人のハイカーがいたがいずれもそのスーパー林道からちょんの間で登ってきたらしい。
晴れていれば南ア深南の山々が望めるのだが長居は無用、早々に腰を上げる。
往路を戻り、堰堤沿いの林道から下るが林道は酷い荒れようで車などとても通れない。
暫く下っていくと登ってくる人がいて、話してみると下の集落の人で、この辺りも先の 15 号台風のせいでひどい状況だったようだ。
沢沿いの神社は秋葉神社の奥社で、秋葉神社は火伏せ信仰で良く知られた神社で、本宮は随分と立派な建物だがあの朽ちかけた神社がその奥社とは信じ難い。
気になっていた展示品を飾ったらしい小屋は秋葉神社のお祭りが毎年 8 月にあってその時に市民から文芸作品を募集して展示をした、という事で、台風前は神社までもう少しいい道だったらしい。
竜頭山は今はスーパー林道から登るハイカーが多く、何本かあった昔からの登山道はどこも寂れているようだ。林道を 1 時間ほど歩いて車に戻り帰途につく。

予想外の展開の山行だった。
沢は「スカ」だったがこれ一本で判断してしまうのもちょっと早計な気もするし…。もう少し探ってみようか。